



1898  
1-8



序

教<sup>の</sup>多<sup>く</sup>此<sup>の</sup>事<sup>を</sup>部<sup>に</sup>其<sup>の</sup>立<sup>ち</sup>か<sup>ら</sup>ず。や<sup>も</sup>も  
 け<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ひ<sup>ひ</sup>し<sup>し</sup>。動<sup>く</sup>じ<sup>じ</sup>夢<sup>ゆめ</sup>に  
 誘<sup>い</sup>き。立<sup>ち</sup>よ<sup>う</sup>と<sup>と</sup>刀<sup>や</sup>を<sup>を</sup>運<sup>ん</sup>ば。道<sup>の</sup>能<sup>く</sup>知<sup>る</sup>命<sup>めい</sup>を  
 う<sup>ら</sup>み<sup>み</sup>く。幸<sup>し</sup>招<sup>め</sup>い<sup>い</sup>師<sup>し</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く。男<sup>おとこ</sup>眼<sup>まなこ</sup>  
 居<sup>ゐ</sup>り<sup>ま</sup>す。心<sup>こころ</sup>の<sup>の</sup>治<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>。吾<sup>われ</sup>世<sup>この</sup>所<sup>ところ</sup>に  
 子<sup>こ</sup>教<sup>を</sup>承<sup>り</sup>て。經<sup>きやう</sup>論<sup>ろん</sup>聖<sup>せい</sup>教<sup>きやう</sup>傳<sup>でん</sup>漢<sup>かん</sup>の<sup>の</sup>才<sup>さい</sup>

くまき事なり。さふ事ありては、  
と、同神と道た。從來、  
僕かき、何とゆふべき便と、  
總角の比、より、  
今も、不斗、  
と、いふ、  
すも、  
と、此世、  
と、此世、

あふ、  
斂、  
中昔の、  
か、  
ゆ、  
ゆ、  
と、  
と、

生涯乃良勇勤健しんげいのちやうきんけん 亦不見愛またみえな 幸さい 生なま といでく 亦また 終はつ 之の 能よ を 晴は らん  
は 終はつ 之の 能よ を 晴は らん  
金平を平記と題して 乃く不情と  
出い づ

海雄六本松の傍に  
細く

金平を平記序

史勇史の志と天下に就也 頂羽が石鼎舎替  
の衆を抜く 張飛水ふらちて 五徳百五  
軍を過 晴ふ坂田氏が 佐力将捷也 兎  
重乃口蹄にありて 西其馬備と知す  
余頃を平記一書以 関を可謂  
子景の志と病く 之若抗が 借下は也





坂田令平在平紀事の一

英雄必知西躰英雄事

蒙客に古今の英士と考ふ。武の者ハ文を以て  
あるを以て武を以て文を以て武を以て文を以て  
今世君臣と撰ぶのふのふ。臣も又君と撰ぶ  
是は依て賢臣ハ主と撰で侍ふ。君臣一致する時ハ  
文武のふのふを以てあり。抑情私天を身六乃  
皇子。貞純親王の王六孫王経基つ弓馬の建志  
武略の魁者たり。ふと総女は初。初  
源姓と賜しよる。以来子孫お繼で武威を日

大平記



志がくくはるを止く色。四方は風文を眺めあり  
小。乾角に南て紅葉の重氣の山あやひの  
徳と石て重氣の立石んく。あきと冷く色  
一。ゆば。徳長て馬よ打糸。岩を越く分入  
く。ま乃え来ん。流の清水さう移ば。樹木  
うてえと掩ひ。荆棘蒙草とて乃と隠と  
絶岩。碧岩すうとけりて。露源々色で。昔昔清ふ  
して。蹄よ磨り。ふ馬と被よ。糸放。或は糸根  
に。糸射。又ら岩角よすうり。子。争万苦して。漸  
重氣のえ小。重き。一乃。岩屋あり。ま。内小。終。岩

流よ。還く。白髪。青眼。か。る。む。女と。年。十七。八。歳  
中。く。そ。り。き。童。歌。の。節。貴。め。さ。く。歌。未。く。眼  
が。一。為。常。う。め。が。唯。二。人。ぞ。産。一。た。り。老。女。徳  
を。さ。り。と。ん。て。竹。志。か。さ。ば。乃。も。か。た。此。幽。谷  
ま。て。来。れ。る。ぞ。徳。而。の。由。り。て。重。氣。と。ま。く。ひ  
あ。れ。り。と。昔。一。う。ぶ。老。女。よ。悦。ひ。美。雄。の。士。あ  
て。法。國。采。り。下。乃。主。り。か。へ。帝。重。氣。と。ん。知。り  
ん。今。母。と。あ。つ。ま。く。頼。光。に。ま。る。ん。一。ん。と。徳。が。は  
し。と。子。若。方。芳。り。絶。岩。陰。と。と。死。重。絶。と。坊  
う。く。頼。光。の。馬。お。に。踏。り。徳。あり。一。一。牙。を





みどり池の  
アツシ女  
友女 此処  
公時  
村  
くろ



坂田の公時  
くろの  
あしれ  
女よあひ



伊弉諾をく出たりと馬一匹は素出とくそ  
ハ一級有り公討若君もあつしせば怪力なく  
多しつゝさじん少くふる多くと制しとれと  
身めも更よ安入ど新方志がからるにあり  
ま後足指ひめて刀をさると人ともるに  
大勇必はは大勇門事法美屋池純女事  
内移事をして教子兼と神今の世を児事の後  
よ頼義云乃は代よ子四天王と號し公討が一子  
分事として有は長一丈は修る面も赤頬皆  
くた右の鬼撃ハ珠の針を挿るこく時道よ

別れて百煉の鏡は血を濯らるごとく  
ハ枯木はさる道立ありこそくめて詠くよふ  
むいづる怨男を逸男乃魔王現を所より  
おそく揺休せ己が武勇に去る人をも  
おろげ世陳強敵とておの投たてはる所ふ  
中づりれ強き也はは出生を尋らふ公討神  
あつと鞆るふ所なるはしと粘りたつと  
水と風も志くくとあつととる厚重の  
つとて執流のとを貴布祿乃あつとひ  
しふ年の程十七八よりなる女房は赤袴は柳









おがすらんをさぐる君いさしく山姥乃後思より  
お生あうは身かまは能の人よの誓せたるよ  
少神もゆるしすまはるや能波引は事申  
りしとくべりといつらるる海忽外長  
二十丈申の大蛇とかりり重紙穿て共に今終  
公内着る者破く起懐物として有るが今社  
不審情てあり。西爰新女と契をこりし事よ  
好くまを我君小忠ある志神も細更す  
傳してゆふ奇物を示すを能長のお心を  
かしくる。翌年秋光率をありし。公内い

死生とあはれ成ふあり

悪童子初学の人際

押鞍馬寺とあり昔時大中老支藤伊勢人勝  
地と取んとす。和太師は形整と。或はありと  
よ。其後よりいふ者お告ふまを。白馬は能とを  
て殺す。びる城ゆふ向て池あり。一のおの  
即ち茅草の中は強いふるはて見るに茅中  
みして思沙門の像とゆふいふ。そと地を聞  
き一字と筆削して皮像と安重。能る寺  
と号と。其結揚ゆあものと運掌に。必極は



を授けよ。寺中の阿耨梨多門天は猶も不  
階のたふさふさ又六波斗なる童取友なるものも  
きく只一人かきと此方と走せぐる。阿耨梨多門  
中より手板筋背違しく眼精尖けりて此童は  
幼童に留りていづる志此子ぬそとぬまは  
父もきく母もきくそとて堂門を括しけり。  
阿耨梨多門後まがうは候持垂へ些しき同き  
んくんと不便さすら。四供の傍小抱せてを肩  
に抱きよ。そ後猶成虫に志さぶ。戯も持ぶま  
る事と余人は持も力業法して身の手すの

花もよとよぬみ。生樂は惣めり事り事なる  
くまばい。持子の成統さそそ。是童のは師たるん  
と親母愛ま音あり。事ハ教多の子供と打更し  
し。くろふ。初とそい。児は師と括せ。首に腕押力持  
あり。いお撲さん。と握合を統と押。脚と痛す死  
す生に。乃そ若。毎自又人七人あり。乃そ若。皆人悪童  
おそ。號なる。或時足送といは。師も智と教なる  
。又字の筆は。若くは。そそ。又。辱し。罵し。ふ  
。童子大。腹を。之。も。智。く。い。物。あ。こ。めん。た。ら。ぬ  
。物。も。又。字。も。母。は。負。つ。ま。力。業。ま。へ。も。面。し。こ

大平言  
夫のは師の素そと振でゆゑとて投をそ机と振  
とつてけ振ぞおらるる。其怒やる是道大かに操  
の骨とそ碑と進二もいひて終入しうべ師の房は  
中実多しを出入む。童子の素そとつらと一  
驂と進出。若者の娘も是より進しうる。  
阿婆梨あまの山とていふ。宣は見ゆ一山は太力  
乃是なる素は師二人はとて死にゆく  
よ進しけしう。童子進むれうゆとてと進乃  
細乃小大石と小揃よぬ。其親よ立かふる。二人の  
悪僧のくく息と進ふ進むると。童子思乃

よまほゆとあぐら。二人のは師は着の骨とたたよ  
楢杓で引よせ。あききおたき了目鬼思くと悪口  
つりかたの今一糸喰ん。は師はと流し坊主の  
合の物あくと命と物と叫々と着とくと  
お合のやと打ふうらうらぬ。卵と石よ抛とくと頭  
飯茶小碑と進の骨ととて推。懐家に打  
りしうい。は後とに分入て新束ととてふふる。  
実と焼く孫とるとはほあぞあひ知とてと  
天物悪童子服性力事  
却て悪童子の執るるとと進めてそとたさくね



源と足に於て吟一が帆と舟を麻糍と引きて  
念氣と一ぬぬ言ぬり行ふ此程の疲るも  
を憐れくんとある岩れよと折れく前後も  
寝てりる。ま時虚中震動して母の大地を  
懐て久くく。忽女房此女と有り童子が例は  
おんこれ髪をわら振るも娘一がゆる氣  
あしくも成長一有り物か。まうううと母  
薩津の跡女也。此事が父天下ふ双る此坂田公  
して源光は仕一人也。佛勅に依て自と契と  
ち一事を設けり。大勇れ子るま日転は武勇

と勵も天下よ名と取し掃世の極史と成す。  
史よつき當時法はよと上大忠女と云者あり。  
皮いけくは初と上よ信し白足の記身より  
く新史成（来て我眷属多くはごぬふ失い  
まうに徳を秀つたの夫先はううと亡び執んと  
大忠女と再身と。れも仏法を信を降んと日転は  
悪も舌増長と法朝此大説うとて容易人力  
此及びま若より手。母いなりてはと法せば  
天下に名と現し。まは母が忘執を去せん。ま  
佐助戸蔭の内林よま系終し新誓する力ら必

奇物有べし。さうして凡そいふに言ひしは、  
うら。電光石火に飛ぶ。さうして凡そいふに言ひしは、  
事子かつて起る。ねら母人。さうして事子かつて起る。  
懐の事やと。後文に於て。さうして凡そいふに言ひしは、  
又も何れか。やん。さうして凡そいふに言ひしは、  
接衣。さうして凡そいふに言ひしは、  
神。さうして凡そいふに言ひしは、  
世のあり。一。時。救多の神。これ中より。撰出さる。  
天の岩戸を。一。教。さうして凡そいふに言ひしは、  
授多。い。さうして凡そいふに言ひしは、

父公。内。未。世。に。さうして凡そいふに言ひしは、  
み。程。極。さうして凡そいふに言ひしは、  
らん。白。髪。たる。巫。一人。忽。然。と。現。る。は。初。末。此。身。  
として。孝。心。深。切。名。と。取。らん。志。神。通。は。さ。成。る。事。  
を。勵。す。父。公。内。天。上。男。に。記。す。は。さ。うして凡そいふに言ひしは、  
り。て。下。一。對。面。を。免。す。一。對。話。必。に。疑。く。  
中。と。授。んと。い。は。は。淫。や。子。振。神。が。さうして凡そいふに言ひしは、  
失。ふ。事。子。大。に。悦。神。の。言。は。さうして凡そいふに言ひしは、  
源。分。入。ハ。峯。花。さうして凡そいふに言ひしは、





先とくしり色着とわく脊と接く先しりや。いん  
招き又もあしと。羽風を立て迎ふる事  
子かしくとあぢひは無之天物及と響はかてせ  
ぬ。結縁居の密しきふ二三も捕垂る伎よ  
せん物以残念うりと。虚中と懸で立ちりる

坂田合平右平記巻之一終



